

[活動報告]

日・EU フレンドシップウィーク 2019 展示 「書庫のなかのヨーロッパ：人文学者のよこがお」開催報告

－ 図書館と学生との協働事業として －

三角 太郎, 小川 知幸, 武関 彩瑛, 瀬戸 はるか,
玉田 優花子, 冬木 里佳, 福田 智美

1. はじめに

東北大学附属図書館(以下, 当館)では, 2019年5月28日から6月7日を会期として, 日・EUフレンドシップウィーク2019展示「書庫のなかのヨーロッパ: 人文学者のよこがお」を開催した(図1)。

当館は昭和58(1983)年9月, EDC(European Document Centre)として指定を受け, 現在はEU情報センター(European Info = EUi)として資料を受け入れ, 利用者への提供を行ってきた。日・EUフレンドシップウィークは, 日本とヨーロッパの親交と相互理解を深めることを目的としたプログラムである。駐日欧州連合代表部が全国の関連機関と連携して毎年5～7月に実施しており, ヨーロッパに関連した展示会やセミナー, 映画祭などが催される。当館でも東北大学EU情報センター主催で毎年展示, 講演会などのイベントを開催している¹。

今年度の主催は東北大学EU情報センターと東北大学

文学研究科院生企画実行委員会である。文学研究科院生企画実行委員会とは, 今回の展示企画のために, 文学研究科の院生有志によって結成されたものである。今回の企画は院生側からの持ち込み企画であり, 当館からの声掛けでスタートしたものではない, という点も特筆すべきである。

実際の役割分担としては, 展示資料の選定や資料解説は院生がそれぞれの専門を活かして行い, 小川附属図書館協力研究員が監修, 附属図書館情報サービス課が事務局業務を担った。また関連企画であるカフェトーク「暮らしてみたい! ヨーロッパ」(2019年6月5日開催), 写真展示「私が出会ったヨーロッパ」についても院生が主体的に携わっている。

本稿では, 展示の内容に加えて, 今回の企画がどのようにスタートし, どのように準備を進めたか報告する。今後の図書館と学生との協働について考えるための参考事例となれば幸いである。

2. 企画の経緯

当館では古典籍の配架・整理, 利用者対応(指導)等の業務サポートのために, 和漢籍や西洋古典等を扱うスキルを要する院生等を古典籍コンシェルジュとして雇用している。本稿の著者の一人である武関は西洋古典を専門とする古典籍コンシェルジュであり, 美学・西洋美術史研究室に所属している。武関は旧教員である児島喜久雄の蔵書を整理する過程で, そこに児島自身による豊富な書き込みやスケッチがあることに気づき, これらは児島の思想をたどる上でも重要な資料なのではないかと考えた。当館には, 個人文庫として受け入れている旧教員等の蔵書が30以上あり, 児島の蔵書もそのひとつである(児島文庫)。児島文庫以外でも書き込み等が遺されているものが多数ある。これらの個人文庫の重要性を周知し, また適切に保存する必要

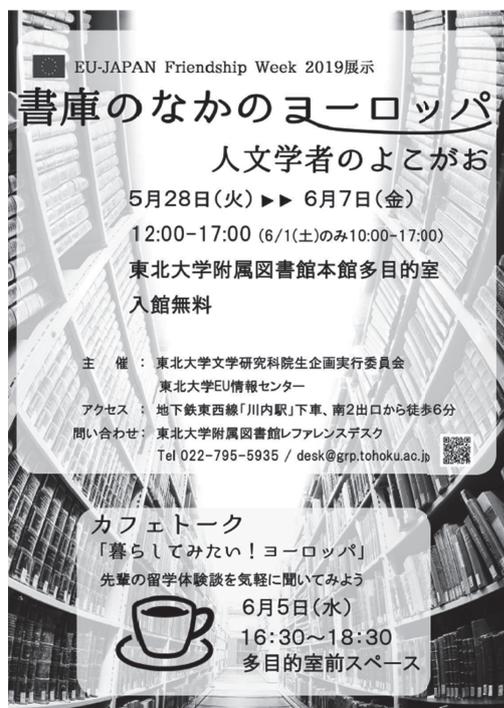


図1 展示ポスター

1 過去のイベントについては, 以下のページにまとめている(2020-01-07 確認)。

性を訴えるために、展示の機会をもうけられないだろうかと考え、さらに周囲の院生に相談し、今回の著者である瀬戸、玉田、冬木、福田からの賛同を得た。

武関は実現の可能性について、附属図書館協力研究員であり本稿の著者でもある小川への相談を行った。2018年11月の西洋史研究会大会の席上でのことであり、その場では何かのイベントに合わせて展示できないか、という相談であったが、二三の実務的な確認のみで終わった。小川は、児島の思考過程に触れるような資料を武関が見つけたということの評価し、また自分自身でもその資料への興味を引かれることから、実現可能性は高いと考えた。そして学生たちが誰かに指示されるのではなく自分自身で発案し最後まで何かを作り上げることに無上の価値があるとも考えた。

12月中旬に、武関は所属研究室の教員とも相談の上、企画の素案をまとめた。その素案では2019年は戦後の学制改革(1949年)で現在の文学部が誕生してから70年目にあたること、そして日本学国際共同大学院プログラムの始動の年にも当たることから文学部全体を巻き込むこともできるのではないかというものであった。

具体的な展示案は、次のようなものである。

- ・文学部のあゆみに関するパネル展示
- ・個人文庫の紹介 例：石津文庫(宗教)、伊東文庫(考古)、大類文庫(西洋史)、河野文庫(仏文)、児島文庫(美学)など 先生方の研究を紹介しながら、個人文庫に残されたメモ書きやスケッチなどに注目。
- ・外国人個人文庫の紹介 例：ケーベル文庫、ヴント文庫、シュマルソー文庫、ミュンスターベルク文庫など 本学への在籍はないが、留学先で本学教授に縁のあった人物であることが多い。
- ・東北大学史料館蔵の講義ノート

この企画素案は、2019年1月に貴重書係経由で、本稿の著者でもある情報サービス課長の三角に提出された。三角は事前に児島に関する展示の開催可否についての打診があり、前向きに検討すると伝えていたが、この時点で具体的な企画を初めて目にした。三角は非常に良い企画であり積極的に進めたいと考えた。一方で扱う範囲が膨大となるため、一回の展示には納まらないのではないかと、また文学部が70周年記念イベントを大々的に行わないならば、院生や図書館から文学部全体にアプローチするのは難しいのではないかと、など

の問題点が浮かび上がった。

この素案をもとに、2019年2月1日に小川、武関、情報サービス課の第1回の打ち合わせを行った。

情報サービス課としては、個人文庫の利活用促進という点からも非常に興味深いテーマであり、是非協力して実施したいということで、企画の主要なアイデアは活かす方向で進めることになった。

対象とする個人文庫については、展示規模や準備期間および人員も勘案し、児島、大類、河野の文庫を中心に取り扱い、必要に応じて他の文庫から資料を援用することになった。打ち合わせではレオナルド・ダ・ヴィンチとの関連で迫ってはどうかという案も出された。児島喜久雄はレオナルド研究者であったし、2019年はこの画家の没後500年というまさに記念すべきであったからである。

また企画初期にあった文学部70周年記念として、あるいは日本学国際共同大学院の発足に関連させるという案については見送ることとなった。文学部が記念イベントを開催するかの情報が得られていなかった事に加えて、児島文庫をはじめとする特色ある諸文庫は、いずれも文学部発足以前の法文学部初期の教官に関するものであり、文学部と関連付けるのは無理があるのではないかと意見も出たためである。

開催にあたっては院生が主体的に企画していることを明示すべきではないか、という情報サービス課からの提案に基づき、参加する院生を「文学研究科院生企画実行委員会」として組織化し、委員会と当館との協働を進めることとなった。

その際、開始時期や内容から、毎年5月から6月にかけて開催している日・EUフレンドシップウィークのプログラムに組み込んでどうかと情報サービス課から提案があった。児島、河野、大類ともヨーロッパへの留学経験があり、当時の人文学研究者のヨーロッパから受けた影響について探るというテーマは、フレンドシップウィークの趣旨とも整合性があり、広報的にも展開がしやすいからであった。具体的な会期についても、在校生保護者や卒業生、修了生を対象とした「東北大学懇談会」(2019年6月1日開催)にあわせるという案が情報サービス課から出された。

以後、武関をパイプ役として、委員会、情報サービス課、そして小川で必要な作業をそれぞれ進めていくことになった。

その後、メールと対面の打合せを経て、日・EUフレ

ンドシップウィークのプログラムに加えることとし、主催は文学研究科院生企画実行委員会と東北大学 EU 情報センターとすることとなった。事務手続きとしては、フレンドシップウィークの事務局へのイベントタイトルの提出期限が3月22日であり、その前に図書館内会議でのオーサライズが必要であることから、そこから逆算して、準備のスケジュールを調整した。また情報サービス課側の体制としては、展示関連は貴重書係が担当し、EU 関連は参考調査係（実施当時、現在はレファレンス係と学習支援係に再編）が担当することとなった。

展示タイトルについては「書庫のなかのヨーロッパ：人文学者のよこがお」と決定した。メインタイトルである「書庫のなかのヨーロッパ」は比較的スムーズに決定したが、サブタイトルの「人文学者のよこがお」については難航し、対面での長時間のディスカッションにより、ようやく決定した。院生、教員、図書館員がディスカッションする機会はあまりないので、これも良い経験になったかと考えている。

会期は調整の結果として、5月28日（火）から6月7日（金）までとなった。メインとなる当館の多目的室での展示の他、エントランスの展示スペースで写真展示「私が出会ったヨーロッパ」も同時に開催することとなった。これについても院生からのアイデアからスタートしたものである。

会期中6月5日（水）には「暮らしてみたい！ヨーロッパ」と題して、院生によるトークイベントを実施することとなった。実行委員に留学経験者が多かったことから、各々のヨーロッパ留学について取り上げた。

展示の準備作業が本格的にスタートしたのは新年度、4月に入ってからであった。展示にあたっては、設営の素案は貴重書係で作成した。展示する資料の選定は院生が行い、キャプションについては院生が作成、小川が監修した。キャプション作成経験のある院生は少なく、監修の小川は、執筆する院生に「調査結果を全て盛り込もうとする傾向があるが、情報の詰め込みは読み手の負担であり、却って印象に残らない。大事なことを何か一つだけでも憶えて帰り、できれば誰かに伝えるなり、調べ直したりするきっかけになればよい。」というアドバイスを伝え、その方針で院生が作成したキャプションの添削を行った。

広報については、武関がポスターを作成し、学内外各所への広報は情報サービス課で行った（図1）。

その他、今回の展示では、東北大学史料館から借り

出した資料もある。院生が史料館を訪問して予備調査し、その上で当館で貸出手続きをとった。

3. 展示概要

本展示（図2）は、かつて東北大で教鞭をとった研究者または関連のある研究者の貴重な蔵書、いわゆる「個人文庫」に焦点をあてたものである。

先にも書いたように、当館には現在までに30を超える個人文庫が収められているが、「日・EU フレンドシップウィーク」にあわせ、主に西洋研究に従事した人文学研究者の個人文庫を取り上げた。美学・西洋美術史の児島喜久雄、西洋史の大類伸、そしてフランス文学および古典文学の河野與一の3人の研究者は、いずれも東北帝国大学の法文学部（現在の法学部、経済学部および文学部）設立期に尽力し、東北大学における西洋人文学研究の礎を築いた人物である。

当時の東北帝国大学へのヨーロッパの影響と彼らの想いをさぐり、この展示を通じて、過去、現在そして未来のヨーロッパへ思いを馳せるきっかけとしていただけに考えた。書庫に並ぶ個人文庫を紐解けば、中心となる研究分野にとどまらない幅広い蔵書や、特徴的な書き込みなどに目を引かれる。本展示では、個人文庫それぞれに異なる切り口を用意し、東北大学史料館所蔵資料や新規委託資料などと合わせた活用事例を提示した。



図2 会場風景（東北大学懇談会）

3.1. 児島文庫

児島喜久雄（1887-1950）は、大正・昭和期の美術史家で、現在の本学文学部美学・西洋美術史研究室の設立期を初代教授阿部次郎とともに支えた人物である。1919年より東北帝国大学法文学部助教授として西洋美術史を担当した。在職中の1921年から1926年夏までヨーロッパへ留学し、各国の美術館や研究所を渡り歩いた。その記録は、詳細なスケッチとともに残されて

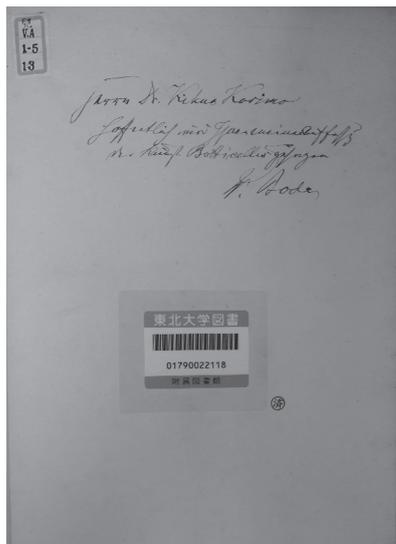


図3 ボーデから児島に宛てたサイン

いる（『児島喜久雄画集』展示資料 no. 9）。留学中には、ボーデ、ヴェルフリン、ヴェントゥーリ、パノフスキーなどの著名なドイツ出身の美術史家と交流を持ち、主として古代とルネサンス美術を研究した。本企画展において展示した、Wilhelm von Bode, Sandro Botticelli（展示資料 no. 4）には、著者ボーデによる児島宛のサインが記されており、現地での研究者との交流をうかがわせる資料となっている（図3）。

本文庫は主にドイツ語を中心とした洋書、約1500冊からなる。西洋美学および西洋美術史に関するものが中心で、古代ギリシアからイタリア・ルネサンス、フランス近代に至るまで様々な分野を網羅している。一方、解剖学に関する書物も複数取められており、研究対象とした古代ギリシアやレオナルド・ダ・ヴィンチなどに做った人体への関心があらわれている。

多くの蔵書には児島自身の手によるスケッチが描きこまれている。研究の合間に描いたと思われる風景画

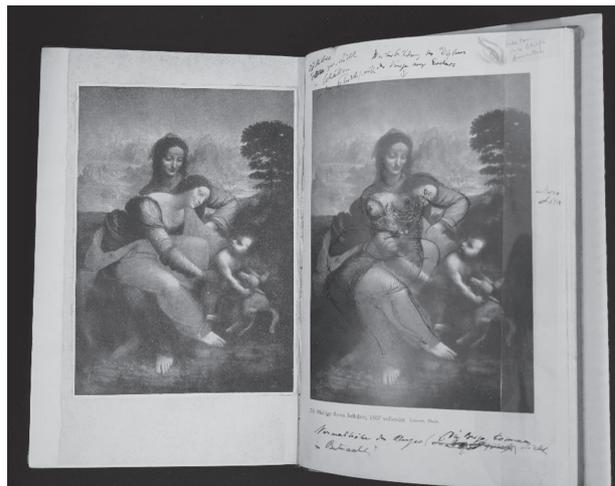


図4 児島の思考の痕跡を忍ばせるスケッチ（右頁）

や肖像画が表紙や遊び紙を飾っていることもあれば、図版の上に直接ペンをはしらせて考察をしたような痕跡を確認することもできる（展示資料 no. 3 図4）。

児島の没後、その蔵書は村田潔（児島の後任で当時本学文学部美術史講座教授）と河野與一（同じく哲学講座教授）のあっせんにより、1956年に当館に譲渡された²。

児島は研究の傍ら、自らも筆を執り多くの絵画作品を残した³。その腕から自らも白樺同人の一員として参加した『白樺』や（展示資料 no. 16）⁴、創業者である岩波茂雄との縁から岩波新書などの装丁などを手がけた（展示資料 no. 9-15）⁵。また岩波書店のマークデザインについても児島に依頼されていたが、実現には至らなかった⁶。

3.2. 大類文庫

大類伸（1884-1975）は、1924年に草創期の東北帝国大学法文学部に迎えられ、20年間にわたり同大学における西洋史学研究・教育の中心となった人物である。

2 東北大学附属図書館 HP, 主要特殊文庫紹介 <http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/collection/introduce.html#kojima> (2019-12-19 閲覧)
 3 多くの絵画作品やスケッチ、在欧中の研究ノート等については、清春白樺美術館（山梨県北杜市）に所蔵されている。
 4 『白樺』同人誌の創刊に際して、児島は執筆のほかにも装丁を担当した。また創刊号のみ、児島は「KK生」というペンネームを使用している。第2号からは、執筆者名、表紙担当者名ともに本名を記載している。
 5 岩波新書の表紙デザインは、創刊に際して児島が岩波茂雄の依頼を受けて担当した。中央に描かれているモチーフは、ヨーロッパ留学中に接した古代のランプを原案にしていると考えられる。扉の四人の人物が風を吹いている絵は、レオナルド・

ダ・ヴィンチの素描をヒントにしたものされ、ギリシア神話の4柱の風神を表わしている。1988年からは旧赤版のデザインを引き継いだ新赤版がスタートしたが、2006年の新赤版リニューアルに際して装丁は児島の絵を元に現代風にアレンジされている。『岩波茂雄—低く暮らし、高く想ふ—』、ミネルヴァ書房、2013年、210-211頁。
 6 飯田泰三監修『岩波茂雄への手紙』、岩波書店、2003年、76-77頁。現在のマークはミレー《種まく人》から着想を得た高村光太郎が制作したメダルがもとになっており、1933年から使用されている。 <https://www.iwanami.co.jp/company/cc1207.html> (2019-12-19 閲覧)
 前述した手紙の末尾にも、すでに高村が新たなマークの制作に着手していることを児島が知っていたことが記されている。

1915年に城郭史研究で博士号を取得したが⁷、1920年から約2年間のヨーロッパ留学のち西洋中世史研究の道へと舵をきった。1932年に日本初の西洋史学専門雑誌『西洋史研究』が大類の主導の下、東北帝国大学西洋史研究室の編集で創刊される。いわゆる大類史学の核をなすルネサンス研究はこの誌上で展開された⁸。中世からの連続性を強調する『ルネサンス文化の研究』（1938）（展示資料 no. 30）はその集大成の1つである。

大類の旧蔵書は各地の研究機関に分散所蔵されている。初期の城郭研究に関する書籍は東京大学に収められたが、後の研究の中心となる西洋史研究に関する蔵書は丸善支店を仲介して当館に収められた⁹。当館の大類文庫は英語、ドイツ語、イタリア語等約1000冊の書籍からなる。とくに、研究の柱であったダンテ、ラファエッロ、マキアヴェッリに関するものを軸として、イタリア・ルネサンスに関する書籍がかなりの数を占める。

東北帝国大学在職中の大類の関連資料としては、東北学大史料館所蔵の「講義ノート」を展示した（展示 no. 26, 27, 図5）。本資料は、東北帝国大学法文学部の学生であった池田哲郎が1926年から1927年に受けた大類の西洋中世史の講義ノートである¹⁰。本資料内には参考資料として数冊の書籍が記されているが、これらは大類文庫のなかに所蔵されていることも確認できた（展示資料

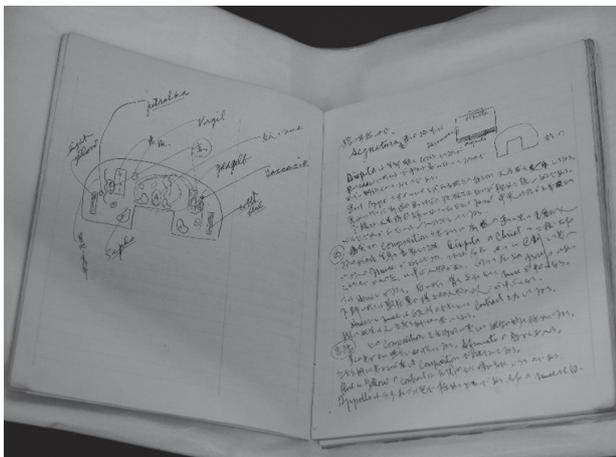


図5 池田がとった講義ノート

no. 22, 25)。大類の講義では、ラファエッロの《パルナソス》が参考図版として用いられたことがわかる。

ところで、大類文庫においては、当館の大類文庫の説明文中にある「1500年以前にローマやヴェネツィアで出版された貴重な古版本（インキュナブラ）なども含まれている」という記述が目された。しかし、当館に所蔵されている資料のうち、インキュナブラとして確認されているのはエウクレイデス『幾何学原論』（Euclides, *Elementa geometriae. Lat. Cum Campani amonitionibus*, 1482）のみである。そこで本展示に際し、インキュナブラとされる資料の同定およびその年代判定を試みた。

インキュナブラ（Incunabula）とは揺籃期の本という意味であるが、主として15世紀のあいだ、すなわち1500年12月31日までに製作された初期刊本を指す。際だった特徴としては、書誌記述に必須のタイトルページやコロフォンを備えていないことが多いため、書誌の確定がきわめて難しいことである。

調査を進めたところ、説明文中に記されていた資料は、『新訂貴重図書目録 東北大学附属図書館本館所蔵洋書篇』に記載されたGiulio Pomponio Leto, *Romanae historiae compendium ab interitu Gordiani Iunioris usque ad Iustinum . III.* であるとわかった¹¹（図6）。15世紀イタリアの人文学者ジュリオ・ポンポニオ・レト（1428-98）による著作で、3世紀のローマ皇帝ゴルディアヌス1世



図6 インキュナブラ調査の対象となった大類文庫由来の『ローマ略史』

7 大類の学位論文は4冊9編52章及び別冊2冊から成った。第1編で日本、中国、西洋各国を扱い、第2編以下で日本の城郭について詳細に論じることで、文化史的研究の側面から日本の城郭の特殊性を描き出した。『官報』第949号、大正4年9月30日付、18-19頁。

8 佐藤伊久男『東北大学西洋史研究室 小史』東北大学文学部西洋史研究室、1994年、4頁。

9 東北大学附属図書館HP、主要特殊文庫紹介 <http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/collection/introduce.html#orui> (2019-12-19 閲覧)

10 池田哲郎は蘭学史・英学史を専門とする歴史学者。東北帝国大学法文学部に入学したのは、大類が同大学で教鞭をとるようになった翌年の1925年であり、本展示で取り上げた講義ノートには1926年から1927年に大類の講義を受けたことが記されている。また、池田は同年に児島の講義にも参加しており、同様に講義ノートが残されている（展示資料 no. 17）。

11 『東北大学附属図書館本館所蔵 新訂貴重図書目録 洋書篇』、東北大学図書館、2004年、48頁。本書中では、年代は「1500年以降」とされている。

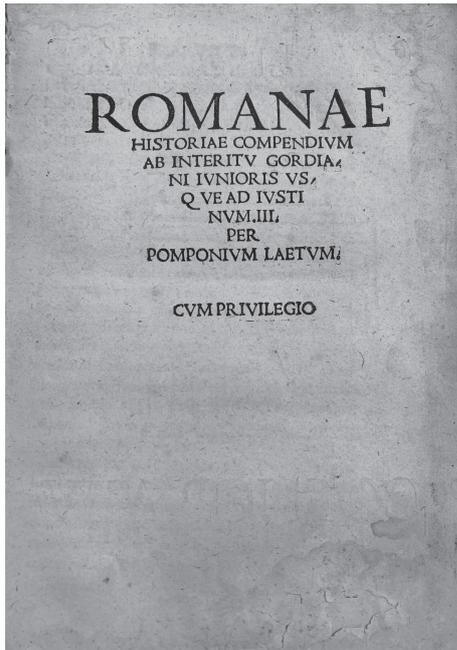


図7 タイトルページ

から6世紀の東ローマ皇帝ユスティヌス1世までの歴史についてラテン語で記したものである。本資料は現在貴重図書として指定され、貴重書庫に保管されている¹²。

当資料は残念ながらコロフォンがなく、資料単体ではインキュナブラかどうかの判断は不可能である。そこで、他館所蔵の同タイトルの本の書誌情報を調査したところ、1499年、1500年、そして1501年出版のバージョンがあることが確認された。つまり、1499年または1500年出版ならばインキュナブラであると確認できるが、1501年ならばインキュナブラではないと判断されることとなる。

次に、他館に所蔵されている同タイトルの本のうち、所蔵館のインターネットアーカイブ上に標題紙または本文頁が公開されているものとの比較作業を行った。しかし、いずれにおいても文字組や注釈の有無などについて完全な一致を見ることはできなかった。

例えば、カタルーニャ図書館（スペイン）所蔵のものではタイトルページの文字組はすべて同じ大きさの書体で統一されている一方、当館所蔵のものでは1行目のROMANAEのみが大きく強調されている（図7）。また、最終ページをみると、カタルーニャ図書館のものではコロフォンおよびプリンターズ・マークが確認でき、1500年にヴェネツィアで出版されたインキュ

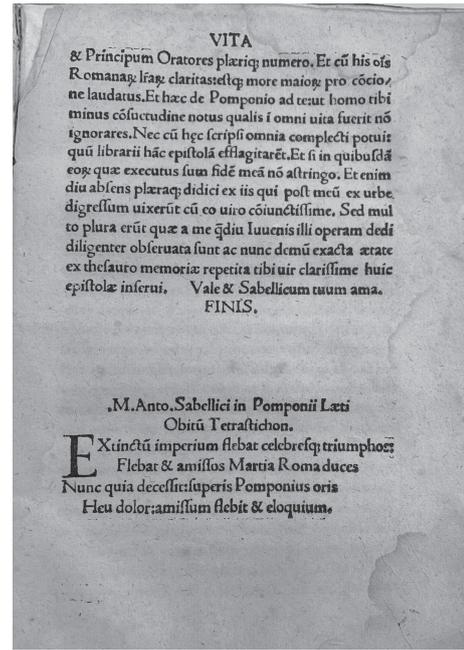


図8 最終ページ

ナブラであるとわかる。当館所蔵のものには、これらのかわりに著者の弟子であるマルクス・アントニウス・サベリクス(1436-1506)による4行詩が付されている（図8）。

ケンブリッジ大学などには3つの年代のバージョンがすべて所蔵されており、今後については、総合的にまとめられているコレクションとの比較検証に期待したい。

なお、小川も15年前に同様の調査を行っているが、その当時と比較して、ネット上に各種のツールが展開している状況でもなお確定までにいま一步およばなかったことは、研究の難しさを端的にしめている。解説は当面は「1500年以前にヴェネツィアで出版された可能性のある（そうだとすればインキュナブラに相当する）貴重な古刊本も含まれている」というように変更すべきであろう。

3.3. 河野文庫

河野與一（与一）(1896-1984)は1929年から東北帝国大学法文学部で、フランス文学・古典語・西洋古代中世哲学史を担当した。1950年には自ら退官して上京し、岩波書店に勤める傍ら、およそ15か国語を習得したその驚異的な語学力で、自由な訳業に打ち込んだ。書店の河野の部屋は、各方面の学者が翻訳に窮すると

12 同上, 48頁。

訪れるため、「語学診療所」と称された¹³。

河野文庫は約 1000 冊からなる。文庫の主な内容は、フランス文学（詩、小説、戯曲）をはじめ世界の文学作品と、文学・哲学の研究書である。河野の妻・多麻や教え子たちによる回想記には、河野が大学での講義や友人たちとの会読で扱った作品についての言及があるが、文庫にはそれらの記述と一致する文学作品も多い¹⁴。言語に着目して分類すると、フランス語で書かれた文献が半数を占める。しかしそのほかにも、ドイツ語や英語はもちろんのこと、ロシア語、ラテン語、ギリシア語、さらにはチェコ語やルーマニア語等で書かれた書籍も含まれており、語学の鬼才であった河野の一面をうかがうことが出来る。岩波文庫には、河野與一（与一）の訳によるものが多数あるが、今回はその代表的なものとして、『プルターク英雄伝』（岩波文庫）の普及版を展示した¹⁵。

また、河野はフランス綴じの本を仕立て直す製本術、特にマーブル模様を作る「墨流し」を余技としていた。本文庫には、河野自身の手によって製本されたと考えられる書籍がある（展示資料 no. 39, 40 図 9, 10）。本書が購入後に改めて製本されたであろうことは遊び紙・見返し紙の紙質から明らかである。また、角革・革背の処理やマーブル表紙の貼り方は製本の基本的な構造から大きく逸脱したものであり、これらの製本が製本業者によるものではなく、河野自身の手によるものであろうことが推測できる。河野は製本において、実用的な観点よりも、気軽に装飾を愉しむことに重きを置いていたのであろう。

河野に関する資料として、『学問の曲り角』（展示資料 no. 32）の原稿も展示した（展示資料 no. 33 図 11）。本資料は、2018 年に『学問の曲り角』の版元である岩波書店の仲介のもと、遺族から当館に寄贈されたものである。現在は整理作業中で、本展示が初公開となる。



図9 河野の手がけたマーブル紙の装丁本（外側）



図10 河野の手がけたマーブル紙の装丁本（内側）

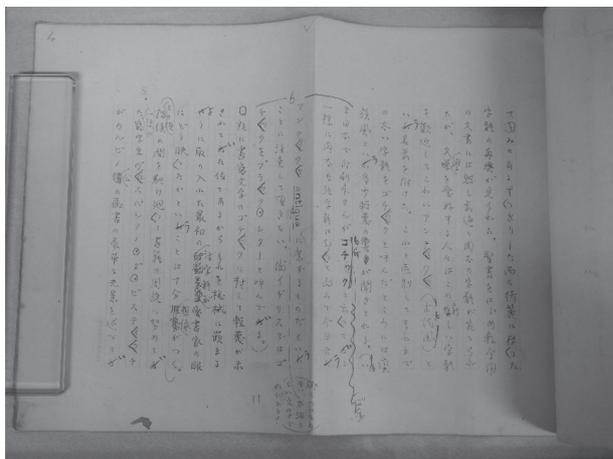


図11 『学問の曲り角』原稿

13 河盛好蔵「語学診療所」、『回想 河野与一 多麻』、「河野先生の思い出」刊行会、1986年、71-75頁。

14 例えば英文学者の飯田耕作は、河野からモリエールの講義を受けたことを記しているが（「若き頃の河野先生」、前掲書、127-130頁。）、河野文庫にはモリエールにかんする書籍が少なくとも15冊含まれている。また、岩波書店3代目社長の緑川亨によれば、河野が岩波書店に就職してから始められた自由な雰囲気のある読書会「河野先生の会」ではキケロなどが扱われ、集う者は河野の直接の弟子でないことが条件で、三島由紀夫、福永武彦、石井桃子などが出席していた。（緑川亨「河野先生

と岩波書店」、前掲書、391-396頁。）キケロについては、弁論術にかんする書籍が4冊確認された。

15 岩波書店在籍時の主な翻訳書として、プルターク『英雄伝』（展示資料 no. 35）があげられる。岩波書店からは、何度か古典文学の翻訳の打診があったようである。当初はホメロス『イリアス』『オデュッセイア』などが候補となっていたが、河野の希望によりプルターク（プルタルコス）に着手することになったことがのちに記されている。プルターク『英雄伝（十二）』、河野与一訳、岩波書店、1956年、320-322頁。

3.4. 関連人物

本展示で取り上げた研究者と関わりの深い人物として、矢代幸雄、阿部次郎、そして小宮豊隆のコーナーをもうけた。美術史家であった矢代は児島とともに『美術新報』を編集した。阿部は美学・西洋美術史研究室の初代教授であり、助教授の児島とともにこれを牽引した。また、小宮は児島と深い友誼を結んでいた。特に、児島らと同時期に東北帝国大学で教鞭を執った阿部次郎と小宮豊隆に関しては、本学にも複数の資料が保管されている。例えば、当館の阿部文庫に収められている、児島喜久雄『美術概論：其他』には、本書を児島が阿部へ謹呈したことを示すサインが残されている（展示資料 no. 41 図 12）。

また阿部次郎の現在にいたる影響力を示すものとして、「阿部次郎文化賞」の盾を展示した¹⁶。これは2016年に同賞を受賞した本学文学研究科の尾崎彰宏教授から借り受けたものである（図 13）。

他にも、東北大学立て看同好会が制作した岩波新書（黄版）を模した立て看板を借り受けて、企画展会場入り口に展示した（図 14）。同好会へのコンタクトおよび借り出しの依頼は院生側で行った。上述したように、この黄版の表紙カバー装丁は中央にあるランプのイラストを含め児島喜久雄が担当しており、今回の展示のテーマに即しているのでは、という発想からであるが、人目を惹くデザインであり、PR 効果も大きかったと考えている¹⁷。

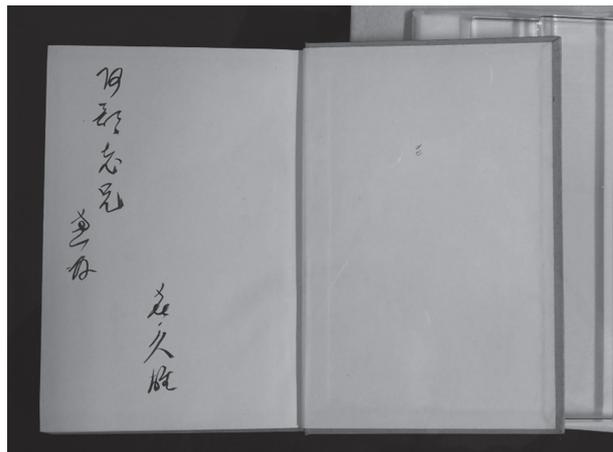


図 12 児島から阿部に宛てた献辞



図 13 阿部次郎文化賞の盾



図 14 岩波新書黄版を模した立て看板

16 阿部次郎文化賞とは、阿部の出身地である山形県酒田市が設けているもので、同市出身の哲学者・阿部次郎に関する研究のほか、哲学、美学などの研究に実績が顕著な個人または団体を顕彰するものである。<http://www.city.sakata.yamagata.jp/bunka/geijyutsu/geijyutsubunka/bunnkasyou.html> (2020-01-09 確認)

17 同好会の Twitter による、この立て看板の紹介は、岩波新書の編集部公式 Twitter でもリツイートされている、https://twitter.com/iwanami_shinsho/status/1113640598475427840 (2020-01-06 確認)

4. カフェトーク「暮らしてみたい！ヨーロッパ」

6月5日に旧カフェスペースにて、カフェトーク「暮らしてみたい！ヨーロッパ」を開催した(図15)。ヨーロッパ留学の経験がある院生企画実行委員会の武関、瀬戸、玉田のトークイベントで、将来留学を考えている学生との交流が目的である。三名からはイタリア、フランスへの留学体験の報告があり、留学中の生活費や奨学金、食や衛生、治安などの生活に密着した話題や、友人の作り方、コミュニティに溶け込むコツなどの情報提供があった。比較的少人数で、フレンドリーな雰囲気だったこともあり、参加者からの質問も活発だった。参加者からは「留学したいという気持ちが強くなった。」「現地での生活が想像できた」といった感想が寄せられた。終了後も熱心に質問をする姿が見られ、留学への関心の高さがうかがわれた(図16)。



図15 カフェトークポスター



図16 イベント会場の様子

5. 写真展示「私が出会ったヨーロッパ」

エントランスの展示スペースで写真展示「私が出会ったヨーロッパ」も開催した(図17)。エントランスの展示スペースでもヨーロッパ関連のイベントをしたほうが、展示会場への呼び込みにつながるのではないかと、ヨーロッパ各地の写真が目玉ではないかと、というアイデアをもとに、学生および職員からヨーロッパ滞在・旅行中の写真を集めて展示したものである。予想以上に写真が集まったこともあり好評であった。

参加型企画として、お気に入りの写真に投票してもらった。かなりの得票があり、得票数に目を引かれて足をとめる利用者も多く見られた。



図17 写真展示会場風景

6. まとめ

来場者数は375名、アンケート回収数は91枚であった。会場でのアンケートには以下のような感想が寄せられた。

「院生さんが地下書庫の個人文庫から興味深い資料を発掘して調査されたという企画がとてもよいです」

「院生の方々の説明がとてもよかったです」

「おもしろかったです。自分も語学を勉強したいと思って大学に来たので、がんばろうと思えました」

こういったコメントは、図書館員が企画した展示では出ないものであった。一方で、

「手にとって見ることが出来る蔵書を参考書として展示していただけるとうれしいです」

「図録のようなものがあつたらよかった」

「本を開いて、本文あるいは見返しを見せるのはよいが、本の外形(表紙・背)も見たい。カラーコピーを添えるなど工夫されたい」

「人物の紹介・解説パネルは一般的すぎて、掘り下げた見方が不足である」

などの指摘もあった。これらのコメントは今後の企画に反映させていきたいと考えている。

7. おわりに

大学図書館では近年「学生協働」がキーワードになってきているが、他大学の事例等を見ても、学習相談、もしくは図書館の通常業務のサポート等にとどまっている事例が大半のようである。今回の展示のように、院生の専門的な知識を本質的に活かしている例は少ないと思われる。今回の院生から図書館への持ち込み、実行委員会立ち上げと共催という事例は、今後の協働のあり方として一つのモデルになるのではないかと期待している。

最後に著者それぞれの所感を紹介してまとめとした。

「本館書庫の個人文庫に光をあてていただき、とてもありがたく感じています。図書館員には語学力的にもなかなか難しい、専門的なレベルの考察も多々あり、さすが、専門家は違うと感心しました。2022年が法文学部創設100周年です。まだまだ先の話ですが、今回の展示の成果も生かしたいですね。可能であれば、今後さらに研究対象として深めてもらえると嬉しいです。持ち込み企画も歓迎します。」(三角)

「個人文庫とは、厳密に言えば、その研究者の触れた研究の全体ではなくあくまで一断片にすぎない。そして過去にいったん成長を止めてしまったものでもある。だが、それでもわれわれは、そこに何らかの人格を認めており、資料の一つひとつを探るときには、融合し脈打ち、何かを目指そうとする生命を何かの拍子に感じることもある。その生命をあたえているのは、じつはわれわれ自身であることに注意されたい。問いかけることにより、個人文庫は蘇り、形を変える。その形を何度でも何度でも問い直すことが、そして観察者ごとに現出するそのさまざまな形を認めることが、探究の営みとして重要なのである。

院生実行委員会のメンバーは、精一杯その試みに取り組んでくれた。わたしとしては資料を改めて多面的に見直すことができたようにおもう。関係各位のご尽力にも記して謝意を表する次第である。」(小川)

「自らで資料を探し展示を組み立てるという一連の作業は、非常に貴重な経験となった。しかし個人文庫

にはそれぞれの性格があり、それらを一つの展示としてまとめることには骨を折った。」(武関)

「自分が所属する研究室の歴史を見直す良い機会になった。欄外の文字・イメージによる書き込みや図版への書き込みから児島の関心を伺うことはできたが、発表されている論文・研究書の内容との関連を指摘するには至らなかった。」(瀬戸)

「同年代で異分野の友人たちとの共同作業は楽しく刺激的だった。装丁を主眼に本を紹介するのも初めてで新鮮であった。また展示という性質上、調査内容を取捨選択して提示する勇気が必要であるという学びが得られた。」(玉田)

「大類の思考の過程を迫るような展示にしたかったが、蔵書に対してどのような問いかけをすればそれが実現できるのか分からず、苦勞した。結果として語りかけてくるものの少ない展示になってしまったように感じ、悔しく思っている。機会があれば再挑戦したい。」(冬木)

「企画に携わることによって、それまで知らなかった自分が所属する研究室の歴史や、自分の研究の近隣分野の研究史を知ることができ、視野が広がりました。また、一般に学問を公開することについて経験し、学ぶことができました。」(福田)

(みすみ たろう, 附属図書館情報サービス課長

おがわ ともゆき, 東北大学学術資源研究公開センター総合学術博物館助教, 附属図書館協力研究員
ぶせき さえ, 文学研究科博士課程後期3年の課程,
文学研究科院生企画実行委員会

せと はるか, 文学研究科博士課程後期3年の課程,
文学研究科院生企画実行委員会

たまだ ゆかこ, 文学研究科博士課程後期3年の課程,
文学研究科院生企画実行委員会

ふゆき りか, 文学研究科博士課程前期2年の課程,
文学研究科院生企画実行委員会

ふくだ ともみ, 文学研究科博士課程前期2年の課程,
文学研究科院生企画実行委員会)

展示資料リスト

I. 児島文庫

No	Title	Author	Year
1	レオナルド研究	児島喜久雄	1952
2	Leonardo da Vinci pittore	Adolfo Venturi	1920
3	Leonardo da Vinci	Fritz Knapp	1924
4	Sandro Botticelli	Wilhelm von Bode	c.1921
5	Sandro Botticelli and the Florentine Renaissance	Yashiro Yukio	1929
6	Handbuch der Kunstgeschichte	Anton Springer	1911
7	古代彫刻の臍	児島喜久雄	1956
8	Die Rassenschönheit des Weibes	Carl Heinrich Stratz	1923
9	児島喜久雄画集	児島喜久雄	1987
10	ベートーヴェン	長谷川千秋	1938
11	ギリシアの詩	高津春繁	1956
12	英和辞典うらおもて	忍足欣四郎	1982
13	ドイツ人のこころ	高橋義人	1993
14	ヨーロッパ歳時記	植田重雄	1983
15	マキアヴェッリ——『君主論』をよむ	鹿子生浩輝	2019
16	白樺 復刻版 第1巻		1969
17	(講義ノート) 西洋芸術史 / 大正拾五年九月廿九日 / 児島喜久雄氏述		
18	Correggio des Meisters Gemälde	Georg Gronau	1907
19	Immanuel Kant Die drei Kritiken in ihrem Zusammenhang	Raymund Schmidt (ed.)	1933
20	Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte	Eduard Gans (ed.)	1840
21	Philosophische Paradoxa	Heinrich Ritter	1867

II. 大類文庫

No	Title	Author	Year
22	Die Kultur der Renaissance in Italien	Carl Jacob Christoph Burckhardt	1922
23	Il Principe	Niccolò Machiavelli	1899
24	The Prince	Niccolò Machiavelli	1908
25	Kunstgeschichte als Geistesgeschichte	Max Dvořák	1924
26	(講義ノート) 西洋中世史 I / 大類教授述		
27	(講義ノート) 西洋中世史特種講義 / 大類教授述		
28	日本英学風土記	池田哲郎	1979
29	The duties of man and other essays	Giuseppe Joseph Mazzini Ella Noyes(trans.)	1907
30	ルネサンス文化の研究	大類伸	1938(1971)
31	Romanae historiae compendium ab interitu Gordiani Romanae historiae compendium ab interitu Gordiani iunioris usque ad iustinum III	Giulio Pomponio Leto	c.1500

III. 河野文庫

No	Title	Author	Year
32	學問の曲り角	河野與一	1958
33	『學問の曲り角』原稿	河野與一	
34	C. Iuli Caesaris Commentarii rerum in Gallia gestarum VII.; A. Hirti Commentarius VIII	T. Rice Holmes (ed.)	1914
35	プルターク英雄伝	プルターク 河野与一 (訳)	1991
36	Война и мир. т. 1-2 Толстой Л. Н	Толстой Л. Н	1979
37	Leibniz und seine Zeit : populäre Vorlesungen gehalten im Anfange des Jahres 1869	Ludwig Grote	1869
38	Paris, Sèvres, Versailles, Saint-Germain, Saint-Denis, Chantilly, Vincennes, Fontainebleau		1924
39	Livre d'amour	C.-A. Sainte-Beuve	1906
40	Полное собрание сочинений Дмитрия Сергѣевича Мережковского т. 2-3 & т. 4-5	Дмитрій Сергѣевич Мережковский	1914

IV. 関連人物

No	Title	Author	Year
41	美術概論：其他	児島喜久雄	1936
42	美術新報		1916
43	人のこと自分のこと	小宮豊隆	1955